



教育学部と附属幼稚園の教員が共同で執筆した子育てのQ&A本『子育て・保育の悩みに教育研究者が答えるQ&A楽しく遊んで、子どもを伸ばす』(福村出版)が今年8月出版された。園では執筆者の大学教員を交えながら地域の保護者を対象に定期的に開催される「コミュニティー広場」で本を紹介(7月26日)。大学・園の取り組みを地域へ橋渡しする。

introducing ふぞく 「幼稚園」 園児の笑顔ににじむ 人の無限の可能性を信じて

附属幼稚園は、教員、学生の幼児教育についての研究の場であるとともに、幼児教育の向上のために研究会を開くなど、研究成果の発信の場ともなっている。少子化の時代にあって、幼児教育への社会的な関心は高い。教育学部では同分野の研究の充実を掲げ、教育学部の中に「幼児教育部会」を設置。附属幼稚園との連携はかつてなく深まっている。

幼児教育部会の設置から3年。教育学部の新井英靖准教授を中心に各専門分野からの協力を得、幼児教育の研究は今、学内・園内の教職員と連携し展開されている。「私たちにとっても、素晴らしい学びの機会です」と近藤祥子副園長は話す。ここ数年は、毎年実施する公開研究会の他に、幼児の「生活習慣の形成」「身体活動量と体力」についてなどの分野で連携を深めてきたという。園児の保護者からも協力を得て、その研究結果を公表することで、家庭で生かされる情報の提供にも努めている。

園児は、水戸市内のほぼ全域とひたちなか市の一部から公共の交通機関などを使って約30分で通園できる、3歳児から5歳児まで。ふだんの一日は、朝、保護者との登園から始まる。園児たちは身支度を済ませると、みずから見つけた遊びの世界へ。課題に向かう時間などを通して集団で遊ぶ(学ぶ)機会も上手に織り交ぜていく。卒園後、子どもたちの多くは附属小に進学する。このあたり



の一貫性は附属教育ならではともいえよう。春には遠足、夏にはカレーパーティーや夕涼み会、秋には宿泊保育(年長対象)や運動会、冬にはケーキパーティーもある。

幼稚園の教育活動に家庭との連携は重要だ。年間行事や「子育て講座」など園からの情報発信だけでなく、保護者とのつながりを深める機会も積極的に設ける。副園長を中心的に1学期は新入児の保護者と、3学期は年長児の保護者と「アセンブリー(子育て座談会)」という時間を持ち、1回10名強の少人数単位で保育を参観した後に、子育てについての考え方や悩みなど、意見交換を行なう。行事がない月には「ふれあいデー」を開催し、保護者が都合のいい時間に来園し、園児たちの遊びや活動の中に参加する参加型自由保育参観日なども設けている。

「コミュニティー広場」と名付けて、未就園児とその保護者に園を開き、遊び場や子育てについて語り合える場を提供するのも附属幼稚園ならではの取り組みだ。地域との結びつきをどう構築していくか、独自の方策を考案する教職員の前向きな姿勢がよく伝わってくるイベントだ。

園児たちの持つ素質は、限りない。その無限の可能性を信じて、日々教職員は職務に励む。季節は秋。春に植えたサツマイモの収穫が待っている。焼き芋を頬張る園児たちの愛らしい姿を共有しながら、大人たちと子どもたちの絆はさらに深まるにちがいない。

附属幼稚園

水戸市三の丸2丁目6番8号
TEL:029-224-3708
HP:<http://kindcms.admb.ibaraki.ac.jp/>

昭和42(1967)年6月、現在地に2年保育1学級36名で開園し、現在は2年保育及び3年保育、計5学級定員134名の園児が学びます。基本的な生活習慣の育成とともに、自主性・創造性を養い、明るく健全な心身の発達を助長し望ましい人格を育成することを教育目標としています。